

鈴木平八君を弔う

小田原史談

第111号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21



奈良室生寺にて



鈴木平八君なぜ逝つた

中野敬次郎

鈴木平八君とおつ合はそんなに永い永いつき合でないのに竹馬の友のようであつたのは、君の明朗で飾り気のない、親しい態度で接せられると、いつしか君の中に溶けこんでしまったからであらう。

苦笑している。彼は呑み出すと大声に談笑しあまり上手でもない歌を高々と歌い上げるのであるから、隣りの部屋や周りから、聞きつけて知り合の人々が集つてきて、賑やかな会になることが多かった。

も、「必ず一生一代の作品をつくらせてくるから待っていて下さい。」
といって、それが出来るまで、これを何かに使ってくれと言つて試作の茶托を置いて行った。日が経ち年が過ぎた。平八さん、あれ忘れてしまったのかなあ、と妻と話し合っているうちに本年の十月二十四日の小田原文化祭参加第十九回鎌倉彫展にふと気になつて妻と見に行つたが、その時、展示品のまっ先に「鈴木平木遺品」という席があつて、その中に五枚の小茶托があつて、まだ彫は白木のままの漆の塗っていない未完成品であつた。他の見物人はどう見ているか知らないが私達二人には大きな衝激でこれが平八さんに依頼しておいた品の未完成であることが直ぐ解つた。平八さんは、これを完成して私達に渡すことを願っていたのが病のためかそれを成し得ないで逝つてしまわれたのである。彼自らが言つたように、「一生一代」の未完成品となつてしまつたのである

片浦史談会の会長もずっと以前からやられていられるように思つていたが、実は会長をやつたのは最後の三年間で、その以前の十数年間では、いつも副会長の位置で会を支えてきていたのであつた。本部の小田原史談会でも、副会長の一人で、何につけても会長を護る役目をして、それを自任もしていたようで、あれやこれや考え合せると、厄介になつたことが多く、有難さが今でも身にしみる。それなのに平八さん君はなぜ早く逝つてしまったのだ。

私は呑みながらよく食べるが、平八さんは呑みだけで食べなかつた。
「すき腹に呑みだけでは病気になる。一緒にもつとおかずを食べなさい」とすすめてると、「よし／＼」と言つただけで実行しなかつた。それが彼の病気の遠因の一つでないかと残念でしかたがない。

平八君は「ひそかなる趣味の男」で、中老になつてからも、いつの間にか水墨画を習ひ、鎌倉彫を学んでいた。鎌倉彫などすぐ上達して天才的の片鱗を見せたある時、鎌倉彫の展覧会に「鈴木平木」という雅号で出ている作品を見て驚いた私の妻が、彼に遇つたとき「ぜひ煎茶の茶托を一そろいこしらえてほしい」とお願いしたら、恐縮しながら

思わず涙が流れた。君は非常に意志の強い人ではなかったか。

小田原史談会で「小田原史談合本第二巻」ができたとき、自動車での配本のため上府中千代台の富田さんの宅で、すすめられてコップ一杯の冷酒を呑んだが、二杯目は固辞して呑まなかったというのを、同行者から聞かされて、私はふとこれはいかんと心配になった。

史談会本部へも役員会に出席することが少なくなった。しかし病気のこととは決して言わず、いろいろ他用あって欠席することを電話して来た。史談会の会合は君が出てくると明るくてなごやかな空気になるが、欠席すると何んとなく淋しかった。そのうち市立病院の入院が知らされた。早速見舞に行ったが、大手術の後なのに傷口が閉ったら、すぐに退院するように朗らかに話して見せた。

幸に経過がよく一旦退院して自宅に帰られたので見舞にうかがうと、ひどく元気で毎日読書している、鎌倉彫も初めていると言うので安心して帰ったが、その時「あと二ヶ月もしたらもうすっかり快復するよ」と言いながら

「快復次第先生と早速全快

祝賀会をやりましょう。先生はウイスキーで僕は日本酒といいたいところだが、しばらくは酒はがまんしてジュースで祝盃をあげるか。」と言ったので「ぜひそうしよう」と堅く手を握り合って別れた。これが平八さんと話した最後の言葉となった。

重態が伝えられた。私が見舞に行ったときには、もう話し合うことはできなかった。そして教日後、君はもう神か仏に召されて遠い世界へ行ってしまわれた。平八君六十八歳と言っても私よりはまだまだ若いのだ。なぜ皆んなを残して早く逝ってしまったのだ。(五七・一〇)

故鈴木平八君の略歴

鈴木 弥平
鈴木 菊江

鈴木平八君は大正二年十一月九日、当時の足柄下郡片浦村米神に生れ、同九年四月片浦小学校に入学する成績は非常に良好でした。

同十四年三月同校を卒業し、四月から平塚農学校(現平塚農業高校)に入学し昭和二年三月同校を卒業して、家業(みかん)にはげみつつ青年会の理事として青年活動に熱心であった。

太平洋戦争の終りの頃、昭和十九年三月 東部八部隊に応召され入隊し、軍隊生活に入る。輸送部隊に編入され、軍隊の輸送の任務中米軍機に輸送船を爆破され戦友の死んでゆく様を見乍ら、九死に一生を得た。広島の陸軍病院に何ヶ月か入

院した事がある。二十年暮復員する。二十一年三月、片浦中学校PTA会長に推され就任する。二十二年四月三十日片浦村村会議員に当選し、二十四年四月十六日辞職する。二十九年四月、米神部落委員当選(現自治会理事)する。永い委員在任中、部落副会長を兼ね、初代農道組合長となり農道開発の為尽力す。

に推選され、みかんの販売部長として活躍する。五十四年四月、米神漁業協同組合理事に推され就任す。

昭和四十何年頃か松本孝作氏に次いで、小田原史談会に入会するや、歴史学の研究熱心は見上げたもので理事に推され、次に副会長推され、中野敬次郎会長の良き相談相手として会の為活躍して来た。

五十五年八月、前会長の松本孝作氏が辞任のあと片浦史談会々長に推され今日至る。五十六年四、五月頃肺の倦怠をおぼへていたが平素健康で齒科医以外の病気を知らない。

鈴木平八君の

死を悼む

松本 孝作

昭和五十七年七月十三日真夜中あわただしい電話の音に眼をさました。何かと思ったら、それは鈴木平八君の死の知らせであった。

夜明けを待って市立病院を訪れた。病に疲れた亡骸は、今や施すべきすべもな

平八君は医師に診て貰う事を好まず、家族の者のすすめ、やっと診察の結果精密検査の必要あり。五十六年六月二十日、市立病院に入院する。病名(胆管ガン)手術の結果は良好で、十月二十六日退院し、ますます快方に向う、海岸を散歩したり、散髪にも一人で行くまでになって、本人も日柄ものだと云って癒るのを待っていたのに、五十七年六月十四日、再入院することになり、家族の者が暖い味噌汁ものむ事もない程手厚い看護の甲斐もなく、七月十三日一時四十三分。六十八歳の生涯を終った。誠に悼ましき限りである。

ここに親交の厚かった私は、その切実なるものを忍び、思い出の一片を記して見たい。

先づ史談会の経緯について少し述べて見たいと思う。私は昭和三十四年、片浦支所長を停年で退職した。そして余生を郷土歴史の研究に入ったのである。これには平素深い関心を持っていた、丁度琵琶を愛好していた時で、当時市会議員であった、落合信一氏と琵琶会で、時々会合に加はることがあった。

私もこれは耳よりな話だと思ひ、小田原にそんな組織があるのか、それでは是非たのむと云って、落合氏にすべてを依頼した。そのとき鈴木市長が会長で、落合氏は副会長であった。早速会費三百六十五円を支払い加入の手続きをすませた。史蹟めぐりが時々あるので、私としては歴史研究がてら、晩年をこの史談会によって慰められると思ひ、この心情はまさに絶頂に達した。

このとき、いつともなく、その話が平八君の聞くとことなつた。平八君は早速、

渡辺弥太郎、鈴木喜六両君と拙宅を訪れた。

そして種々話の末、史談会加入の申し入れをした。またこれとは別に、江の浦の松井孝之君と偶然史蹟めぐりで一緒にすることもあった。

昭和四十五年八月二十三日であった。小田原史談会で、片浦史蹟めぐりが挙行された。中野会長のものと、百人の会員が二台のバスに分乗し、あの炎暑のなか、江の浦の赤沢観音を振り出しに、天正庵、相生の松、根府川関所跡、釈迦堂、鹿島踊、そして米神に來り、石橋山合戦の本陣と云はれるスケタ畑、平八君は自ら私有地を提供し、「源頼朝合戦の地佐殿畑」と記し、標柱を白布にて覆い、除幕式の形を取った。

こころより約五〇米奥伊東祐親の陣地と思う、大畑ヤグラ山の地を訪れた。そして根府川石の採掘所、住吉丁場の壯觀を見学し、石橋山に引き上げた。

ここに休憩をなし、中野先生の講演を聞き、地元の人はいち処で解散した。

その後これに参加した人達で、片浦史談会結成の議が盛り上がり、史蹟めぐりの反省会を兼ね会合が催された。議事は会員の獲得である。

片浦四部落に呼びかけ、会員の募集したところ、何とその人数実に百人にもあまる人数に達した。予想外多かったので、一同大喜びになり、着々準備をすすめていた。

このとき、片浦連合自治会長が根府川の、内田一正氏であった。内田氏は早速自治会長に連絡し、これに協力すべく種々奔走してくれた。

翌年四十六年二月十一日「建国記念日」を期し、片浦支所に於て、片浦史談会設立總會が盛大に挙行された。

意気上り、役員を選任し事業計画を樹立した。そして史蹟めぐりは年一回行事として必ず行うこととした。このとき平八君は役員の一員で、つねにリーダーとなり、よく会員の世話をしてくれた。

小田原主催の史蹟めぐりにもよく参加された。会を重ねることにより、その重きをなされ、小田原史談会理事に推された。その後更に副会長に選任されたのである。

昭和五十五年は、石橋山挙兵八百年祭に当る年で、地元としては種々多忙を極めた。これも会員諸君の協力により、すべての行事も滞りなく終了した。

そして九月江之浦公民館で年度の總會を開いた。事業報告、予算決算を審議した後、役員を選挙に入つた。私は設立以来会長を十年続けて来たので、よい時と思ひ本職を退いた。そして後任に鈴木平八君が推された。

就任以来わづか二年、病魔におかれ、遂に逝去された。まことに悼ましい限りである。

平八君は平塚農学校を卒業し、農事に専念され、みかん造りは特に熱心であった。

小田原市と合併するや、造林熱が抬頭し財産区の外部落有林が各部落にあつた。米神でも五十町もあつたので、雑林では置けぬというのが一般の見解であつた。平八君は率先し、造林運動に邁進し、森林組合を組織し、組合長に推され、三十歩にも及ぶ植林を継続事業で、遂に達成することが出来た。今や杉松が亭々として成長を見るに至つたのである。

そしてまたここに特筆せねばならぬことは農道である。みかんの運搬には過重なる労力で、皆頭を痛めていた。これは、どうしても農道の必要があるということ、有志間に於て折にふれ語り合つていた。

平八君はこの提唱者の一人で、熱心に奔走し、その推進につとめた。今日ある農道こそ、あらゆる困難を克服し美事ここに、完成を見るに至つたのである。

平八君はよく鎌倉彫り、絵画等を熱心に勉強して居

つた、趣味豊かな人であつた。此の度は思はざる計報に接し、万感胸に迫り哀悼の情禁じ得ず。ここに謹んで冥福をお祈りする次第である。(片浦史談会名誉会長)

平八君と私の出会いとはなんといいても小学校の一年生に入学してからでありました。根府川の収谷と言う所に小学校がありまして、當時は米神とか根府川とか部落を代表している様なけんかをよくやつたものです。目をくりくりさせた小じつくりな、けんか早いやつだつた。

まあなく学校が焼けてしまったので各部落別々の寺子屋勉強で、ようやく新しい学校が出来て喜びもつかの間、関東大地震で学校は倒れ燃えてしまった。学校が出来ても本校と分校の別々で、こんなわけですから二人の思出は実って、片浦中学校PTAの役員をして役員をやつて二年目に六三制が制定され十周年を向え

平八君と私

内田 一正

互いにたすけあつて無事行事も終る事が出来た。そこで行事に付いて御厄介になつた私の知人に御礼するこゝとなり、平八君はは俺が良い腕時計を持って居るかとの事でそれを贈る事になり、持つて来た時計が又すばらしいのもつた。いから、他の安い物でもと言いますと、安く手に入つたからとの事で、私の出し分も出させないで其の時計を贈つたのですが、それから二年ばかりたつて他の用件で会つた時、内田さんいつかいただいた時計、良い時計だと思つて居たらあれは競輪時計だつた。実は動かなかつたので時計屋にもつて行つたら、お客さんこれは競輪時計と言つて修

理は出来ませんとの事で競輪時計とは競輪場内で旦那全部負けちまつて、此の時計舶来物ですがと言つてだまして売るので競輪時計と言ふのだそうで、後で平八君に話したら吃驚して目をぎよろぎよろさせてごうけつ笑いもひげめがちでした。どこで手に入れたか競輪にこつてるとの話も聞かなかつたしと、まあ友達どうしの笑い話であります。

今から十年ばかり前の事ですが、平八君から電話がありました。かずさん俺の息子を置ちゃん(私の弟で当時経済連の常務理事)にたのんで経済連に入れてくれとの事、それではたのむよと、もう入つたつもりのごういんさで電話を切つたやつ。その事だからと思ひながら弟にたのんだら今就職は受けて居ないとの事だつたが、私もごういんに、そこをなんとかとのんだ。弟もようやく、それならさしあつて秦野の工場に入つてもらつて後でなんとかすとの事でましまりました。其の時の喜びようは親の子を思ふ心にうたれました。葬儀の時経済連に務めて居る私の息子が受付に居るましますと、此の家の平君が同じ職場に居るとの事、私

もはじめて聞きまして私の息子とやつの息子が同じ職場について良かった。

故鈴木平八さん

との思いで

渡辺 弥太郎

片浦史談会にとつて、本当にかげがえのない人を亡くしてしまつた。

十数年前小田原史談会にいち早く入会され、十一年前の小田原史談会片浦支部の設立に松本孝作氏、松井孝之氏等と共に努力され、百名を数える今日の片浦史談会に迄発展させた功績は偉大であり、この会が続く限り鈴木平八氏の名は消えないだろう。

又故人は非常に几帳面な方で、例えば「小田原史談会」小田原史談会、片浦史談会の史跡巡りの案内記はもとより、その行先々の寺社仏閣のパンフレット、旅行先での旅館の簿を入れた紙迄も種類別に、年次別にとず、いつ誰が来てもすぐに判る様にしてありました。又新聞の切抜きを三十七年より死去されるまで厚さ八分位のアルバムに計六〇冊もはってありましこ。それ

も一般社会とかスポーツとかに分け整然と本箱に並べられてありました。

やすらかにやすらかにと心の中でつぶやいた。終り

とかごま化して呉そ」とたのみ扱った事もありましたその平八さんはもう居ない悲しきかな!!

中野先生や香川さん、相沢さん等よき飲み友達を失つてしまつたらう。

片浦史談会の会長になりその後病に少しづつおかされた頃、史跡巡りの件や役員会の件で家に行くといつても「有難とう、苦勞ばかりかけて申訳ない」と平身低頭の思いをこめて感謝して居ました。

反面自分が動けないのがくやしかつたのでしよう。そういう時奥さんが私に酒を必ず出して呉れました。平八さんには生菓子や、私も酒を御馳走になるのはつらいけど、彼平八さんほどんなに飲みたかつたらう病とは言え喉から両手が出そうな気がしてならなかつた。本当に申訳ありません

駅前の「ニウス山崎」、宮小路の「幸繁」又米神にある「ひろい」や「松本酒店」で良く飲みました。飲むと一寸と音痴気味な唄を歌い私に「飲んでら食わなけりゃ駄目だ」と言つてたつて。そして勘定を払おうとする時「何言つてんだ俺にまかせて置け、そんなに払いたけりゃ此の次にしろ」と決して払わさせて呉れなかつた。

二度か三度か平八氏がトイレに行つたときに払つてしまい、板前さんには「何

合掌
でした。少し飲んで来ると奇妙な動作奇妙な言葉の時々発していた事も私の頭の中に残る。

それは勿論故人自身の酔つてからの所作であり、わざとらしくらぶ故人の人間性を良い意味でそのまま出していた様に思われます。

善は善、悪は悪如何なる人であらうと、はつきりと言葉で相手に対したそのたいつど行動が今もって印象に残ります。

その他故人に対する色々なエピソード業績等については、一正さん、鈴木弥平さん等がお書きになってるので、今更私が書く必要は無いと思います。

願わくば故鈴木平八さんよ、いつまでも私達の史談会を見守り下さい。故人のご冥福を祈りつゝ、つたない筆を置きます。

思い出の人

山崎 悦子

碧い海と蜜柑山に囲まれた片浦地方が私は大好きです。その一部落である米神に鈴木さんは住んで居られました。私が鈴木さんと云うより平八さんと言つた方が適切ですが、知り合つた

片浦の方々には事の他ひいきして頂いて居りました。幼い頃私の母の生家のある石橋の海岸で泳ぎ、そして蜜柑を一杯食べて育ちました。平八さんとお会いした時、何と明るいそして何で思いました。隠し事、まがつたことは大厭いでそれで思いやりがありました。そして親戚の方々のおつき合

いが良く従兄弟会を良くやり、従兄弟の方々を大勢連れて私の店へ寄つて下さいました。色々楽しい話をしてはみんなを笑わせ和気合々のうちに帰えられました。お酒が好きで酒を呑むと又一味違つた楽しい人でした。

後年鎌倉彫りを始められそれも自分が一番年を取つ

ているから一番先に稽古場へ行き支度をするのだと何時も先に掛けられました。短期間に鎌倉彫りもマスターなされ、手鏡文箱と細かい手のこんだものを幾度も見せて頂きました。又史談会には大変力を入られ、中野敬次郎先生の片腕となつて会の運営に當つて居られました。

そんなある日平八さんが入院していらつしやると聞きあんな頑丈な体をしていらつしやたのにとびっくり致しました。療養の甲斐もなく病魔には勝つてず帰の人となられました。あの大きな笑い声が今でも耳許に残り、にこやかな笑顔と共に店へ入つて来られるような気がしてなりません。

鈴木平八氏を

偲んで

下川 茂三郎

去る七月二十一日の理事会に於て中野会長より、片浦ご出身の小田原史談会副会長鈴木平八氏が七月十三日逝去あそばされた。とご報告をお聞きして愕然とすると共に、謹んで御霊に哀悼の意を捧げます。

私がお目にかかつた最後の日は何時の日?一年近くもご養生のこと耳にして、ご全快の一日も早いことをお祈りしておりましたがよもやこんな早くご昇天なさるとは、誠に惜しみてあまりあることであります。

人生無情の世とはいえあまりにもほかない現実でございませう。いかに嘆き悲しみましても氏の御霊をふたたび此の世に返すよしはななく、名残り惜しく万こくの涙も眠りをさますに足りないことは存じながらも、惨嘆の涙をとどめようがありません。

今も昨年発行頂いた小田原史談編内の氏筆を拝読しながら、共に旅したお元氣な口調のお声や、面影が走馬燈のように頭の中を駆けめぐり、激愛にみちた温容と、卓越した才腕、高潔な人格は、今尚尊敬の念はやみません。私達會員のためにご精根をお傾け戴きましたことは枚挙にいとまなく、その徳をしのび追想しながら、お別れしなければならぬことは思いがけぬことであり残念な次第です

これは鈴木さんご遺族にとつてのご不幸ばかりでなく、史談會員にとつても大きな不幸であり、一同痛恨おかざることあります。しかしながら先記ご遺筆跡のご功績は、我々の胸底ふかくきざまれて、すばらしい指導者としてのご遺徳は長く賛仰の的として、記憶されると信じております 会報第六十一号「史談のごども」 「前段階」私が史談会に入会した心。

一言にして云えば昔を知りたいと思つたからです。戦後の社会を眺めた時あまりにも過自由であり、一部社会が狂つて居ります、それには落着いた社会に是正する事です。先づ己個人から反省が必要で過去即祖先を知る事でありましょう。そこに歴史の重要さと史談会の意義があると思ひます

この記は入会浅い私が仲間として戴いた時の心情とまattered相通じ合うものがあり、偲んで記すことは遠慮すべきであるかも知れませんが、故人の恩情を受けた悲しみだけであつてはならない、今は亡き意志を大切に継ぎして、誠心誠意微力ながら会の発展に寄与することを、心からお誓い申し上げて謹んでやすらかなご冥福をお祈り申し上げる次第でございます。

鈴木平八さんの

葬儀に参列して

富田千春

七月十三日の夜、事務局の沖山さんから電話で「副会長の鈴木さんが亡くなられて、今夜お通夜、明日葬儀なので是非都合して出て欲しい」との事でした。昨年の六月、市立病院に入院されたという事は聞いたが、秋には退院され、その後の役員会にも出席され、「よかったですね」と挨拶して、そ

小田原駅前から熱海行のバスに乗って、米神というバス停で降りる。今年も晩梅雨で七月になつても、毎日うとうとし雨の雨が降り続けているが、今日ばかりはカラッと晴れて、暑い夏の太陽が、海岸沿いの道をばい照りつけている。米神という所は昔からの良い漁港で、緑の蜜柑山に取り囲まれた港に長く突き出たコンクリートの防波堤の上は、二、三十人程の釣り人が、のんびり釣を楽しんでいる。近くのお葬式とは殆んど縁のない、閑閑な風景である。

この港を庭先にした様な小高い所に、悲しみに包まれた鈴木さんの豪華な邸宅がある。前の道には、生前の功績をたたえるかの様に各団体から贈られた花輪が沢山並んでいる。史談会には最後まで情熱を傾けて、骨折っておられただけに、真中に飾られている「小田原史談会」の大きな花輪が心なしか一際精彩を放っている。

史談会からは、中野会長を始め、副会長、役員十数名が参列した。大勢の会葬者で、ごつたがえす中に、小田原駅前や、宮小路の料亭の女将の姿が見えた。何かの親戚かと思つて側の人に聞いたら、「来るのが当然でしょう」という言葉が返つて来た。そういえば、終戦直後、食料不足で、蜜柑は座つていて、どんどん高く売れ、札を受け取つて親戚に投げ入れたとか、吟につめて札を始末したとか蜜柑景氣のすごかつた、紀の国屋文左エ門を思はず、米神柑橋農家の事を思い出した。

出棺は一時。自宅の前で子供に当るといふ分家の鈴木孝さんから、遺族代表の挨拶があつた。「昨年の六月二十日入院する迄は、とても元氣だつたとか、若い頃から地区の中心人物で、森林組合や、柑橋組合に骨折つたこと、今でも鎌倉彫や水墨画が熱心であつたとか」こうした趣味のため、豊かな人柄が、なる程と思はされた。「今年の六月十四日、市立病院に再入院、家族の手厚い看病に、看護婦さんも感心しておられたとか」本当に恵まれた人生ではあつたでしょうが、平均寿命の年毎に延びた今日六十八歳では、いかにも惜しい事である。

ころげていた事があった。どんな事でも平気で、淡淡といつてのける鈴木さんである。

小田原史談会は、最近はず中野先生を会長として、役員も充実、安定しているが数年前頃は役員の色々の思惑もからんか、荒れに荒れたことがあった。役員も逃げ腰で出て来ない。史談会はどうなるかと思う様であったが、鈴木さんはその頃もずっと副会長という重職で、まとめるのに苦労された。総会等を持つものにも大変なものであった。中央公民館といっても、小学校の二階の古い教室が会場で鈴木さん一人で、司会者であり、事務説明者であり、文字通り孤軍奮闘された総会の事等が思出される。色々曲折の多かった史談会を「もう辞めたいよ」といながら、長年、副会長の重責をつとめ、穩健にここ迄引っぱりつて来た功績は偉大である。

小田原史談会総括編の第二巻が、昨年の春完成、鈴木さんは元気で、杉崎さんの車で何十冊も積んで、役員の家へおろして廻られた。その時私の家にも見え、お茶代りに出したお酒を、おいしそりに飲んで行かれた姿が思い出される。まだ昨年の事である。

忌中払いをすまし、新しい祭壇の飾られている鈴木さんの家を出る。日は西に傾いているが、米神の海岸は相変わらず長閑である。後にずっと連る蜜柑山の線

平八さんを惜しむ

相沢栄一

私が正月に、肝臓を病まれて療養中の鈴木さんのお宅に、御年賀に伺った時は御元氣だったので、三十分も談笑し、安心して帰ったのでした。春になり再度入院されて、六月の中旬頃思わしくないと知らせて二回三回続けて御見舞に伺ったのでしたが、御会いしたのはそれが最後でした。みかん山の斜面に焼くように照りつける太陽の下で又、箱根おろし、や相模灘から吹き上げる寒風の中で、敵しい柑橘栽培の作業で、長い年月鍛へ上げた、頑健な体だったが病には勝てなかった。悲報を聞いて私も哀惜の念に胸打たれたのでした。私と彼との初めての合出、それは史談会の合会でした十年も前の事でしよう。史跡めぐりの車中で、後の方からエンジンの音と共に、

と、静かな伊豆の海と、別荘地の様なこんな良い所に米神旧家の長男として生れた、悠々自適の生活をして来られた、在りし日の鈴木を懐かしく思い出す。別荘地の様なこんな良い所に米神旧家の長男として生れた、悠々自適の生活をして来られた、在りし日の鈴木を懐かしく思い出す。別荘地の様なこんな良い所に米神旧家の長男として生れた、悠々自適の生活をして来られた、在りし日の鈴木を懐かしく思い出す。

鎌倉彫りを初められた彼が彫刻の道具や桂材の入った重い手提をさげて、よく家に立寄った。そして、美しく美事に出来上った作品を見せてくれた。彼が心根を傾けて作った手鏡も頂いた家内も彼の作品に魅せられて、鎌倉彫りの仲間入りをしたのでした。その後水墨画の稽古も初められた私も芸術的意欲の旺盛な彼を讀へたのでした。

家でも長男の嫁の御世話をお願いしたが、多忙の中を、よく人の面倒をみられたようだった。私は家では自分を物分かりの良い人間と、自負して居りながら、何故か、娘の結婚話等になると、いつも古ぼけた前近代的な父権を振り廻して、家の者を困らせていたそんな話を耳にした彼は、御自分の家庭の話を私に語りながら、リベラリストのような立場で、私をたしなめてくれたのでした。

私はアルバムを捲りながら、彼と何回となく共に思い出した。虎動会の旅で、琵琶湖の東北岸にある、渡岸寺を訪れて、官能的な人間の躍動した、あの十一面觀世音菩薩の御像を、彼と共に見詰めながら感動の一時を過ぎました。三陸に旅した時、藤原氏一

族の権勢の象徴のような、中尊寺の目も眩む、あの金色堂の前で、固唾をのんで語り合った年もありました史跡めぐりの車中で、又、宿での夕食時に、彼が奥さんの入れて置いてくれたと言わうウイスキーを楽しそうに、ジョルダーバックから取り出して、仲間達と杯を交し合う風景を、私も心温る思いで眺めたのでした。信州地方第一回の史跡めぐりの時でした。私共は朝、別所温泉の宿を出て歩いて裏手にある北向觀音堂を見て、常楽寺と安楽寺を訪れた、国宝、八角三重の塔に往時の工匠の逞しい建築意匠を感じながら、宿の前の駐車場に歴つたのでした。その時老人が一人はぐれてしまったので、彼は宿の車に連れて来た寺にお探ししてくれたのですが見当らず出発予定の時間が一時間余

もおくれてしまった。俺が残って探すから、と言う彼の言葉に甘へ、私共は探し当ててくれる事を願いながら、次の見学地である信州国分寺跡に出かけたのでした。中食予定のサービステーションで、老人を連れ彼と落ち会い、私共は喜びながら、彼の献身的な努力に心から感謝したのでした。あれが彼の参加された、史跡めぐりの最後になろうとは思はなかった。彼は堅苦しい、会の運営者ではなかった。会を和やかに運営して行くためには、なくてはならない、人だった硬軟合せ持つ誠実な人。私共史談会も本当に惜しい人を見失った。正義派で、リベラルな、彼のあの特意的な語り口が、笑い声が、私の耳に聞へて来る。鈴木平八さんの御冥福を心から祈りましょう。

甲州方面
名勝古社寺探訪の会
香川 政治
主催 小田原史談会
期日 昭和57年8月22日
午前7時15分藤棚前出発
講師 会長中野敬次郎先生
今年の天候は真夏とはいえず毎日不安定な天気模様で当日も出発の頃は危ぶまれる空模様の下を7時15分定

時刻にバス二台に会長以下八二分乗出発走行は比較的順調、松田、小山、須走と進み山中湖畔のドライブイン小憩後忍野村忍草の忍野八海に9時20分着、天気は恢復カン／＼照り中野先生の解説あり富士山の伏流水の湧出する豊富な湧水量に一同驚嘆、この地より富士の霊峰を仰ぐ形容はまた格別、写真家、画家が多く訪れるとのこと、然の生憎霊峰富士は雲にかくれ雄大な英姿を残念ながら仰ぐことが出来なかった。八ツの池の周辺を鑑賞10時車上のとなり富士吉田、河口湖、御坂峠を越え御坂町より国道一三七号線と別れ勝沼町に向う。沿道の両側は葡萄畑で枝もたわわに垂れ下っている葡萄の房を横目に眺めながら走行勝沼町を走り抜け塩山市熊野に鎮座されている熊野神社に11時30分到着杉木立に囲まれた中に古色蒼然とした神社、さすが古社そのもの、一同参拝後中野先生のいろ／＼説明あり一行は三々五々見学12時於曾屋敷に向う。於曾屋敷は残念ながら時間の都合で割愛し甘草屋敷に直行12時10分着、間口十三間半奥行六間半一重三階切妻造りの豪家(重文)。現在高野家の住宅となつて居るので屋内は参観出来ず一部分だけ

見せて戴き12時30分ここを辞し昼食所恵林寺境内にある一休庵に12時40分着食事時間五十分13時30分出発放光寺13時40分着直ちに参堂大日如来像、天弓愛染明王坐像、不動明王立像の三仏をお祭りしてある堂内にて住職が寺伝その他いろ／＼と説明を聞き14時10分寺を辞し、向岳寺14時20分着訪れたところ折悪しく寺の重宝は上野博物館に寄託したとあるとのこと、止むなく中門付築地塀(国重文)だけ参観今日最後の古社山梨市北窪に在る窪八幡神社に14時45分着、この神社は非常に珍らしい建築様式で、三連の社殿を一つの屋根の下におさめた連棟社殿にて応永十七年(四〇)の再建であると言ふ。室町初期に建築された貴重な建物、よく長い歲月風雨に晒され今日まで遺つたものだと思ひ打たれながら神社をあとに帰路に就く15時10分往路の道を一路急ぐ。

大分時間も短縮されたが国道一三八号線は依然として車、車のラッシュ須走までノロ／＼運転、須走より再び間道を小山町に抜け二四六号線に出るとこも車の洪水牛歩のあゆみで山北まで、山北より南足柄市の平山、内山、関本より甲州街道をスムーズに南下小田原駅前着20時一同元気に解散結局予定の時刻より一時間半程超過、交通事情とはいへあまりにも皆さんの帰宅が遅れて大変御迷惑をおかけしましたことを紙面を以て深くお詫び致します。今後はなるべく日曜日には避けて平日に行いたいと思う。

次今回の探訪地を当日のプリントその他により参考までに記してみよう。

探訪所

(一)忍野八海(山梨県南都留郡忍野村忍草)

国指定の天然記念物の指定をうけ、忍野八海は富士山の伏流水が湧水する八ツの池で、湧池、鏡池、濁池、底無池、銚子池、菖蒲池、出口池、お釜池の総称である。湧出の清冽と水量の豊富と、周囲のハリモミ純林(国指定天然記念物)の美とで名高い。

八海のうち銚子池にまつる面白い伝説が伝えられている。それはあの附近の農家で嫁入りした日、おひらめの席をまわって酌をしいた嫁さんが、ブーと尻をひいて、集つた親戚や近所の衆に笑われ、恥ずかしさのあまり、銚子池に飛び込んで死んでしまったと言ふ悲話が伝えられている。それで銚子ケ池と名づけられた。嫁さんは憐れ晴着のまま、冷たい忍野八海の池に飛び込んだ、手に銚子を持ってきた、故にここを「銚子ケ池」と呼ばれるようになった。

実際はこの嫁さんは尻などひらないで、空いていた腹と、ゆるんだ帯がいっしょに鳴つたらしい……

(二)熊野神社(塩山市熊野)

祭神は伊佐奈岐尊と熊野八柱神、文保二年(三〇)に建てられた鎌倉時代のもので熊野造と呼ばれる最古の神殿で建築も史上重要な意義を持つている。(一間社隅木入春日造)重要文化財東西に並列する本殿六社のうち東側(向つて右)二棟が鎌倉期左側三棟は江戸時代のもの、拜殿は天文十八年(四六)室町時代のもので重要文化財一重入母屋造である。

(三)於曾屋敷(塩山市上於曾)

十五世紀文安年中室町時代に豪族加賀美遠光の子於曾四郎光隆とその子孫が住んだ屋敷(現在広瀬氏宅)高さ三坪の土堤をめぐらした東西約八四坪、南北約九一坪の広大な屋敷には杉、竹林が茂り、その周囲には幅三坪の濠をめぐらし、その外方には更に石積し一坪幅の溝をめぐらしており、これはかつての外濠の名残りであろうと推定されている。

屋敷の周辺とか内濠と外濠の間には、主家を囲んで郎従や下人達の住居が配置されていたと言ふ。

(四)甘草家敷(塩山市上於曾)

江戸時代代々名主であった高野家の住宅(現在居住されている)、今から二五〇年前享保年間の建築で、間口一三間半、奥行六間半一重三階の切妻造の巨邸。

徳川三代將軍家光の頃より薬用植物である甘草を栽培して幕府に納めていた為一般に甘草屋敷と呼ばれている。南面して建てられている巨邸は重要文化財に指定されている。

(五)放光寺(塩山市藤木)

寺は往古より真言宗の談林寺で真言密教の根本道場である。真言宗智山派に属す。元暦元年(二六)甲斐源氏新羅三郎義光の孫安田遠江守義定の創立、開山は賢上人。

。大日如来坐像(重文)坐高九四・五寸、藤原末期作寄木造漆箔仏

。不動明王立像(重文)像高一四六・四寸、藤原末期作、寄木造漆箔仏

。愛染明王坐像(重文)像高八九・四寸漆箔仏

(六)向岳寺(塩山市上於曾)

臨濟宗向岳寺派大本山、塔頭四〇、末寺七〇〇寺

。絹本赤色ダルマ像(国宝)南宗画様式(鎌倉期)

。絹本著色大丹禪師像(重文)室町期作

。絹本著色三光国師像(重文)室町期作

。中門付築地塀(国重文)室町期作

。桃山時代の庭園は名高い

(七)窪八幡神社(山梨市北窪)

重要文化財、窪八幡宮は源義光以来甲斐源氏の深い崇敬を受けた。本殿は十一間社流造、三連の社殿を一屋根の下におさめた連棟社殿。応永一七年(四〇)再建拜殿は天文三年(三三)御供殿として造営、のち天文二年(三三)武田信玄が祈願成就の為造り替えたものと伝えられる。

。窪八幡神門(付石橋し鳥居)

重要文化財、神門は四脚門で切妻造、永正八年(一

五一一) 武田信虎が再建したものの、神門前の石橋は天文四年(一五三三)に造立、擬宝珠高欄付の反り橋で石造遺構として貴重。

附記

放光寺は有名な恵林寺の

北隣接した所にある。放光寺、向岳寺ともに恵林寺より徒歩五、六分位の所にあるのでお出かけの節は恵林寺を中心として訪ねられたら……?

ミミズ 蚯蚓のたわごと

大井 諦 玄

氣心 濁 己 人 氣は長く 心は丸く 腹立せず 己小さく 人は大きく。

五經の一) 第三卷公孫丑章句上に、氣について述べておられますが、その大要は、次の通りであります。

この和文の古諺とゆうか 誨言とゆうか、七五調で、第三句外は(く)でまとめ第三句は、濁音の(ず)で英語や独語の詩も同型式である。全体の意味は、申すまでもなく、短気は損気だから怒らず、諍はず 心は丸やかに、角を取り、いつも和で、腹を立てることなく、自己を小さく、卑下して、他人を大きく褒めた、之、他人の善事は、人に伝え、自分のよいことは、他人に口外しない、この様な心掛けならば、我が家は平穩無事、社会も和やかに、自己も亦真実真誠であるとゆう一種の処世訓であると思はれます。

心は無形である。この心の発露したものが志と云い志が命令を氣に伝え、人体は活動するのである。志を心の発露とゆう理由は、志は「心指」で、心のちらつと露れたもの故に心が働いて志となり、志が氣を働かせて、種々の動作をする。氣は志の命令を受けて働き志は氣に命令する。以上のように公孫丑と孟子の間答で心と志と氣の説明して居るが、公孫丑が孟子に活然の氣とは、どうゆうことですかと質問すると、孟子は「言ひ難し」と言葉では説明は困難である。併しその本体をゆうと、氣は分量は非常に大きく、又堅固で、屈げたり、撓たりすること

は出来ぬものである。之を養生するには、平生反省して何時も曲った行為をせず道理を正しく、人為的に一膨脹させるような事を為さないならば活然の氣は拡大して、最後には、天地の間に満つるのである。活用する点からゆうと、活然の氣とゆうのは、義と道とが一

体となり、義として為すべき所は、この氣かこれを助け、道の行はねばならぬ時は、矢張りこの氣が之を助けてゆくのである。仮にこの氣がなかったなら、道義も氣に助けられないから、仮令如何に道義を行おうとしても、その道義は縮つて用をなさない。

百六年を迎えた吾が国鉄と 外国鉄道の四方山断

額 田 喜代 春

(四十九) 修理工場 鉄道の車両は、ある一定の距離を走ると、故障して

クレーンで吊りあげて、車輪から台車の枠をはずします。

いなくとも、鉄道工場に入ります。そこで、不良部品を取り換えたり、不良箇所を直したりします。

(四) 台車枠の修理 台車の部品をとりはずして、不良のものは、取り換えます。

その理由は、運行の途中で車両が故障すると、大きな事故になるからです。国鉄の場合は、全国に二十箇所以上の鉄道工場を持って

(三) 車輪の修理 すりへった車輪は、元の形にけずり直します。

います。

(二) モーターの修理 各種の電気テストを行ない、不良のものは取り換えます。

私鉄の場合も、それぞれの工場があり、定期的に入ってくる機関車や、旅客車貨車等を修理しています。では修理の種類をあげてみましょう。

(一) 車体と台車をクレーンで分ける 天上クレーンで車体を吊

(一) 台車わくと車輪をわけ

(二) ノントラで運ぶ 車体の前後を専用の運搬車運びます。

(二) 車体の検査 床下の機械類を取りはずして検査します。

(三) 車体の塗装 スプレーで車体を塗り直します。

(三) 車体と台車を組み 天上クレーンで車体を吊

(四) 整備 電気の配線を継ぐ等の整備をします。

(四) 試運転 修理が終わると、あらゆる点の試運転を行なって万全を期します。

(五) 機関区のはなし 機関区とは、機関車の配置されている基地のことです。大きな機関区では、百両前後の機関車が収容されています。

同じように、電車の配置されている所を電車区、客車の配置されている所を客車区、その外いろいろな車両が配置されている所を運転区といえます。

これ等の区では、給油、給砂の外に、ブレーキプロットの取り換え等のような日常的の整備や、モーターのブラッシュの取り換えといった、月単位の定期検査

も行なっています。それから、機関区では、鉄道工場に入った時のような、大がかりな解体作業をすることはありませんが部分的な作業の出来る施設があります。次の通り

① 給油 ディゼル車の燃料の補給のほかに、台車の軸受けなど、給油の必要な箇所が多くあるので、時々、油を補給してやらなければなりません。

② 給砂 機関車は、レールがしめられていると、動輪がから回り砂を撒く装置をもっています。



編集部より

此の特集号は故鈴木平八氏の為面影を偲んで出すべく準備致しましたが紙面の都合上他の三氏の原稿を加えました事を御了承願います。